

【佳作】

【水が豊かな国であるために】

栃木県

佐野日本大学中等教育学校

二年

海老沼

実花

みなさんは世界農業遺産を知っているだろうか。私自身は世界遺産のことは知っていたが、今年テレビのニュースを見て初めて世界農業遺産のことを知った。これは、世界的に重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域を認定する制度のことだ。認定されているのは、平成三十年三月現在で世界十九か国、四十九地域。日本は小さな島国だが、なんとそのうちの十一地域に選ばれていた。

その中のひとつに、今年の三月に認定された「静岡水わさびの伝統栽培」がある。静岡県はわさび栽培発祥の地とされている。沢治いに開墾した階段状のわさび田で肥料を極力使わずに湧き水に含まれる養分で育てる方法が評価されたとのこと。私も普段お刺身やお寿司などでわさびを使うが、きれいな水でなければ育たないことや湧き水に栄養がたっぷり含まれていることを知って驚いた。そして、栽培に湧き水が利用できるということは、その場所が自然豊かな山々に囲まれているからこそ、きれいな水が保たれているのだと感じた。

私は小学校六年生の夏、家族と一緒に栃木県茂木町にある那珂川自然公園へ行った。その場所は鮎が有名で河川に竹などをたくさん並べて作ったやなという魚を捕る仕掛けがあった。やなへは自由に行くことができたので、私もはだしで入った。水は澄んでいても冷たく気持ちがよくかった。少し待っていると魚が次から次へとやなに上がってきた。鮎の生鮎として水のきれいなところを好むというので、この川の水質がよいということがわかった。また、魚が多く住んでいる川は魚たちが藻をエサとして食べてくれるためヘドロが少なくなり、水が澄んでいくそう

だ。
しかし、やなに上がるのは魚だけではなかった。たくさん空き缶やビニール袋、食品トレイなどのゴミまでもが流れ着いていた。ゴミの中をよく見るとゴミの間にはさまれて死んでしまっている魚もいたのだ。

私はとても悲しい気持ちになった。

ゴミを捨てて汚しているのは私たち人間だ。缶やビニールなどは水の中で自然にかえることは絶対がない。やなにかかっているゴミはごく一部だろう。そのまま海へと流されたり、川の中でずっと置き去りのままになっているゴミもあるはずだ。そうすると、海や川はあつという間に汚くなり、魚も住めず、水質も悪くなる。水質が悪くなるということは、私たちの生活に使用している水にまで影響が及んでくるということになるのだ。

そこで、きれいな水を保つために自分でできることはないかと考えてみた。例えば、海や川、山などのレジャーの際にはゴミを必ず持ち帰るようにすることだ。また、落ちてくるゴミがあるのであれば拾うだけでも大きく変わってくるだろう。さらに、日常生活でもできることはある。歯磨きやシャワーの時は水を出しっぱなしにせず、こまめに止めるように心がければ、水の使い過ぎを防ぐことができる。そして、食器を洗うときなども油分を先にふきとり、洗剤の量を調節して使用すれば汚染も少なくなるはずだ。こうして、一人ひとりが水を大切に使い、気づかうことで水の環境を保つことができる。

日本には、清らかな地下水に恵まれたところがいくつもある。そのおかげで人間はもちろん、植物や動物も生きていくことができるのだ。私たちはこの大切な環境を守り、次の世代へと受け継いでいけるように努力していかなくてはならない。そして、これからは世界農業遺産に選ばれて、世界中の人たちに日本が自然に恵まれた素晴らしい国であること

を知ってほしい。

【入選】

【ふるさととの川】

栃木県 矢板市立矢板中学校 二年 箱田 緋優璃

「お母さん、この水、とってもおいしい。何か甘いよ！」

私たち一家が宇都宮市から矢板市に引っ越したとき、私が最初に母に伝えたのは水のおいしさでした。水を「おいしい」だとか「甘い」だなんて思ったのはそれが初めてで、まだ保育園児だった私には、それが不思議でなりませんでした。これが矢板の水に関心を持った最初の出来事でした。

私が六年間通った川崎小学校は、ともに那珂川の支流である内川と宮川の合流点にあり、水環境がとても美しい学校でした。学校の周りにはほとんどが田んぼで、水生動物や水生昆虫がたくさんいました。合流点の宮川寄りには魚がよく集まる場所で、コブナやハヤをよく網ですくったものでした。ときにはカルガモやシギも飛来したりして、いくら見ても見飽きない、無料の水遊園でした。

内川も宮川も水源は高原山です。隣町である塩谷町には日本名水百選に選ばれている尚仁沢がありますが、その水源も高原山です。私は保育園児のときから、矢板の水は日本でも指折りの名水だと思っています。

家が宮川沿いにあるので、私は宮川の方に親しみを感じています。宮川は湧水地から二十キロメートル足らずの川ですが、実に様々な表情を見せてくれます。宮川を遡っていくとすぐ左手の崖の上に塩谷氏の居城だった川崎城の跡があります。最も栄えたのが鎌倉時代。矢板の原点と言ってもよい場所です。そこから北上すると川に沿って川崎反町集落です。昔ながらの米作農家が多い地域です。少し山間部に入ると幸岡地区、片俣地区です。狭い土地にも水田が作られています。先人たちの苦勞がうかがえます。長井地区に入ると丘陵地帯を中心にしたリング栽培農家が並びます。低い土地には水田が広がり、今の時期は田植えが済んだ頃です。上流に向かうと、養魚場を兼ねた釣り堀があります。宮川との深い関係が感じられるところです。さらに上流にのぼると寺山ダムがあり

ます。寺山ダムは一九八四年に作られたロックフィルダムです。寺山ダムの水は上水道、農業用灌漑、水量調整に使われています。寺山ダムのお陰で矢板市全般の農業が安定したと言われています。寺山ダム湖沿いの道路を進むと出井水神社の湧水が湧き出ています。この水は遠くから汲みに来る人がいるほどの名水です。無料で汲み放題というところにおもてなしの心を感じました。さらに進むと、左手に宮川溪谷が静かに流れをたたえています。源流の湧水地付近は県民の森できれいに整備されています。矢板市がどれだけ水と真剣に向き合ってきたかを、宮川を遡っただけで感じ取ることができました。

宮川には矢板の歴史が刻まれています。そして、その時代時代の人々の様々な思いや願いにあふれていました。現在の矢板市は水害には無縁だと思っていました。確かに寺山ダムや塩田ダムが上流できてから水害はほとんどなかったようです。けれども最近の異常気象、特に台風や集中豪雨の傾向を考えると、安心できないと思いました。

特に内川の増水には注意を払う必要があります。もともと内川はもつと川幅が広がったのだそうです。そこに堤防を築き蛇行していた川を直線的に直したのです。しかも、内川の上流には水を調節するためのダムがありません。高原山で昨年の九州北部豪雨のような集中豪雨があれば、大惨事に繋がるかもしれないのです。内川にも宮川のような歴史や思いが残っているはずで、ふるさととの川に災害の歴史は刻みたくないと思います。そのためにも行政も個人も意見を出し合って、正しい水害対策を進めておくべきなのです。異常気象による想定外の水災害が起こってからは遅いのですから。

【入選】

【水と共に】

栃木県

矢板市立矢板中学校

二年

川崎

桃枝

昨年の八月、私の住む地域では十六日間連続で雨が降るということがありました。その長雨の直後に台風が襲来したので、洪水が心配されました。実際に大雨・洪水警報が発令され、警戒が呼びかけられました。私の家は川のほとりにあるのでなおさら気がかりでした。幸い台風のコースがそれたので、思ったほどの被害もなくほっと胸をなでおろしました。けれども長雨の降り続く間に襲った、八月十九日のゲリラ豪雨では近隣の大田市、さくら市、高根沢町、県央でも県南でも浸水被害で交通機関が大きな影響を受けました。

私の住む矢板市で洪水被害があったのは、一九九八年の那珂川水害のときです。那珂川水系の内川が氾濫しました。私の生まれる前のことです。そのときも家のすぐ近くを流れる宮川は洪水を免れました。上流の寺山地区に作られた寺山ダムができるまでは、宮川はかなりの暴れ川だったようで、上流から大きな岩が転がってきたのだと地域の高齢者から聞いたことがあります。寺山ダムは中規模のロックフィルダムで、一八四年に作られました。上水道の水源、灌漑用農業用水、川の水量調節に使用されています。寺山ダムの少し上流の道路わきには「井出水神社の湧水」と呼ばれる名水があり、宮川の水源のひとつですが、寺山ダムは矢板市にとっての水の守り神のような存在です。

ゴールデンウィークになって、田んぼには一面に水が張られ、田植え機があらちこちらに見られるようになりました。ダムができるまでは、田植えの時期が降雨量次第でズレ込むことがよくあったのだそうです。今ではゴールデンウィーク明けには整然と植えられた苗が五月の風に吹かれています。

私の住む地域は高原山に向かう丘陵地帯で杉や松がたくさん生えています。大きな水害から免れているのは、森林の保水作用もあると思います。

矢板市は決して雨の少ないところではありません。特に夏場は夕立が多く、短時間ですが、ゲリラ豪雨のような激しい雨も珍しくないので。高原山に近いせいで天気が変わりやすいのです。

それでも水害が少ないのは、寺山ダムと森林や水田、畑などがバランスよく治水しているからだだと思います。今後も私たちが水と安全に生活していくためには、このバランスを守るために細心の注意を払うことが必要です。

また、矢板市には温泉や溪谷沿いの遊歩道、湧水の無料取水場など、水を通しての癒しの場がたくさんあります。川のほとりで育ったせいか、川のせせらぎを耳にすると心が落ち着きます。特に森林浴をしながら聴くせせらぎの音にはどんなストレスも洗い流すパワーを感じます。水はまさに命の源です。

私は、水の親しみ、水を愛する故郷を誇りに思っています。

矢板市は水の豊かるところなので、なかなか気づきませんが、世界規模で見ると、日本の降水量は一人当たりになると百七十七か国中九十六位と決して上位ではありません。ただ、水の活用方法が上手なので、水が豊かに感じられるだけです。ですから、私自身も水の豊かるところに住むからといって油断はできません。水に感謝し、今まで以上に大切に水を使う必要があると思います。

現に高温多雨のアマゾン流域で日照りが起こり八メートルも水位が下がったり、オーストラリアの干ばつで小麦が壊滅的な打撃を受けたりなど事実がたくさんあるのです。温暖化や海水温の上昇や下降、偏西風の変化で、気候はどのようにでも変化するのです。

私たちは異常気象の中で生活していると云ってもいいでしょう。注意を怠り、判断を誤れば、水は恐ろしいものとして牙をむくことでしょう。私たちの水と共に生きるための知恵が問われているのではなんでしょうか。

【佳作】

【日本が「水の国」であり続けるために】

栃木県 鹿沼市立南押原中学校 二年 大塚 莉乃

日本は「水の国」と呼ばれるほど、水に恵まれた国です。家でも学校でも蛇口をひねれば、きれいで安全な水が手に入ります。私達は、当たり前のように水は簡単に手に入るものと考えてきました。しかし、他国ではそうはいかないようです。水が簡単に手に入らず、私と同じくらいの子供が濁った水を飲んでいたり、畑の作物や家畜のために遠くまで水をくみに行ったりして困っている様子をテレビで見たことがあります。水は、ほんのちよつとであっても、とても大切に貴重なものであることは間違いありません。最近、熱中症予防のために、水分をしつかりと補給しないと、部活動の顧問の先生はよくおっしゃいます。私達人間の体の六〇％は水分で構成されています。初めてそれを聞いたときにずいぶん多いなと感じましたが、そのうちのたった三％が失われるだけで熱中症の症状が現れるそうです。全体としては多いようでも、ほんのちよつとバランスが崩れただけで、命の危険にもつながることが起きるのです。私達人間にとって、欠かすことのできない水ですが、当然、植物や動物もまた水を必要としています。一日の大半を水くみに費やす国や地域の子供達は、学校に行く時間さええないのです。人間が人間らしい暮らしをするためには、一日に五十リットルの水が必要だと言われています。ところが、日本では、一人あたり三八〇リットルの水が使われているそうです。世界の人口のうち、六分の一にあたる十一億人の人々が一日五リットル以下の生活を余儀なくされているのにも関わらず、日本に住む私達はシャワーを一回浴びるだけで、六〇リットルの水を使っています。仮に水が無駄に使っていなくてもほんの少しの工夫で節約ができるのではないかと私は思います。

それほど大切な水が簡単に手に入らなくなってしまったら、日本はとも深大な状況になると思います。そんな心配をするようになったのは、温暖化防止の取り組みに加えて、異常気象という言葉がたくさん使われ

るようになってきたからです。

二年前、私の住む鹿沼市でも異常気象が観測されました。信じられないくらいの大雨が降ったのです。私に通っていた小学校のすぐ横の田んぼは濁流になり、橋が流されてしまいました。皆、無事でしたが、友達の家も流されてしまいました。西の方では崖崩れが起き、かなりのけが人が出たと聞いています。そのときは雨が多く降る異常気象でしたが、その逆に雨の降らない異常気象もあるのかもしれない。

日本の河川は短くて急だと社会の授業で習いました。ですから、降った雨はあつというまに川から海に流れていってしまいます。そこでダムが造られています。いつまでも、日本は雨がたくさん降る豊かな「水の国」であるという保証はありません。温暖化や異常気象の影響で、雨が少なくなってしまうらどうでしょう。

私の住む市では、現在、ダムが建設中です。現在の水需要を根拠に、多額の資金がかかるダムは必要ないと反対する人もいるそうですが、それは、日本が「水の国」であり続けることが前提です。温暖化を防止する取り組みを続けるだけではなく、異常気象に対する備えもまた大切なのではないのでしょうか。ダムは私が住む地域のように、川の源流をたくさん持つ水の豊かなところにしか作れません。そうして貯めた水は自分の住む地域だけではなく下流の県のためにも役立つのだそうです。異常気象はうれしくありませんが、万が一に備えることはとても大切なはずです。

温暖化防止の取り組みや異常気象への備えをしながらも、水を大切に使うっていくことが私は何よりも重要だと思います。日本がいつまでも「水の国」であり続けるために。

【佳作】

【「水」と生きる】

栃木県

宇都宮短期大学附属中学校 三年

見目 莉里佳

「みそ汁一杯分の汚れをきれいにするのに風呂何杯分の水が必要だと思う？」上下水道の見学をして来た弟から質問された。みそ汁一杯分という二百ミリリットルぐらいだろうか。「二杯分？」と答えると、「正解は五杯分でした！」と言われた。たった二百ミリリットルのみそ汁分の汚れをきれいにするのに千五百リットルもの水を使うのかと、とても驚かされた。他にも、油大さじ一杯、約十五ミリリットルだとお風呂約十五杯分の水が必要らしい。油大さじ一杯は家庭でも普段よく使うものだ。それを全国で家庭で油大さじ一杯分汚染したら：想像すると恐ろしい程の水が必要になってしまう。作ったみそ汁の残りも捨ててしまったら？そんな事を何年も続けていたら、汚染された水をきれいにするのにいつくのだろうか？湖の水やダム貯水量が減ってきているというのに。いつか湖も干上がって蛇口をひねっても水が出てこなくなる日が来るのではないかと考えてしまう。

ニュースで、貯水率が二十五年間最低になっているダムがあると問題視されていた。それは、首都圏一都五県の水源となっている利根川上流八ダムだ。貯水率は五割を切っていて、平成二十八年六月十六日から、東京、千葉、埼玉、群馬、栃木、茨城で十パーセントの取水制限を行った。私は栃木県に住んでいるので、首都圏の水源が枯れてしまうのはとても困る。首都圏一都五県の水源の貯水率をこれ以上下げないためにどうしたら良いか。洗い物の量を増やさない、汚れを新聞紙等でふき取ってから洗う、歯みがきや手洗いの時等水を流しっぱなしにしない、花の水やりに雨水を活用する等、私たちにも出来る事を実践していきたい。

世界では、家に水道がなく、わざわざ遠く離れた井戸まで水をくみに行かなければならない途上国や地域が沢山ある。以前テレビで見たことがあるアフリカ南部のある国では、水くみは女性や子供の仕事とされており、安全な水を求めて十キロメートル以上も歩く事も珍しくないとい

う。私も二リットルのペットボトルを数本持ったことがあるが、かなり重い。帰り道は特に重労働だろうと思った。この仕事がある以上、子供は学校に行けないし、女性は働きに行けない。安全な水を手に入れることが容易になれば、水くみに使っていた時間と労力を減らせ、子供は学校へ行けるようになり、女性も様々な職業に就くチャンスが生まれるだろう。貧困からも脱出することが出来るかもしれない。それに比べて、日本は家に水道もあり、井戸までくみに行かなくても蛇口をひねればきれいで安全な水がいつでも出てくるのが当たり前。その当たり前があるからこそ、人々はつい無駄にしてしまうのではないか。例えば、家から二キロメートル離れた所にしか井戸がなく、その水を生活用水として使うとなれば皆大切に使うだろう。一滴も無駄にはしたくないはずだ。

水は人々の命を支えている重要な資源なのだ。安全な飲料水の確保は人々の健康や命の問題につながっている。農業用水の安定供給は食料問題につながっている。そして、突然起こってしまう洪水や台風などに応じる治水対策は、人々の生命や財産を守り、社会の安定にとって不可欠である。日本でも災害や被害のニュースが後を絶たない。それだけ水資源の管理や気候の変動への対応も今後の重要な課題となると思う。真水の不足や水質汚染は世界経済に大きくかわっていると考えられる。ならば、今からでも遅くはない。私たち国民一人一人が少しでも意識して気を付けよう。そんな小さな努力の積み重ねが大きな成果へつながると思うのだ。